



TITLE:

# 図書館業務電子計算機の更新について(概報)

AUTHOR(S):

---

CITATION:

図書館業務電子計算機の更新について(概報). 静脩 1990, 26(3): 14-15

ISSUE DATE:

1990-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37064>

RIGHT:

システムも流動的であり、また、附属図書館の目録システムのトラブルもなにかと多く、さらに、機械に対するある種の恐怖心もあり、まごつくことが多かった。しかし、最近はNCのシステムも安定し、マニュアルも整備され掛員の慣れともあいまって、入力は一掃に行われている。

さて、京都大学全部局の目録の電算化にむけて図書館主催の講習会が2月中旬から順次開催されている。これは、先行館である附属図書館が、部局の目録の電算化がスムーズにすすめられるようサポートする目的で開くものである。新たに入力を始める職員の方々は、不安も大きいだろう。しかし、「習うより慣れろ」という言葉があり、これは、入力についてもあてはまる。この講習会で概略をつかんだら、マニュアルを手にもまず端末の前に座ることをおすすめしたい。附属図書館の目録担当者も、実際に入力しながらマニュアルを再読し、目録規則を確認する等を繰り返す中で、しだいに入力に慣れていった。

今後、カード目録がオンライン目録に順次移行し、加えて、本学創立以来蓄積されてきたカード目録のデータベース化が実施されれば、データベースは確実に充実していく。一方、本学のオンライン目録検索のレスポンスタイムの向上にむけて、

DBMS<sup>\*5</sup>の改善の計画もすすめられているので、データ内容、検索システムともに向上が期待される。このような状況の中で、全国大学図書館目録電算化システムが利用者にとってさらに有用なものになるよう、我々図書館員は努力したいものである。

最後に、人づてではあるが、ある大学の小さな図書室の職員の声を紹介して本稿を終わる。「一人でカード目録を作っていた時は、常に、これでいいのか、間違っていないかと不安にかられることが多かった。でもNCのシステムで目録を作成するようになってからは、全国の仲間と共同で作っているということが支えになり、不安はなくなった。」

- \* 1    NAtional Center for Science Information  
      System—CATaloging service
- \* 2    「目録システム利用マニュアル データベース編」(学術情報センター、昭和62年12月)
- \* 3    Kyoto University Integrated information  
      Network System
- \* 4    NAtional Ceter for Science Information  
      System—Information Retrieval service
- \* 5    Date Base Management System

---

## 図書館業務電子計算機の更新について(概報)

昭和59年度(昭和60年1月)附属図書館に、汎用の中型コンピュータ導入の経費が予算化されて5年が経過しましたが、この年末年始にかけてこのコンピュータの機器更新が行われました。

附属図書館に最初に導入されたコンピュータは、昭和59年4月の新館開館とともに稼働し始めた、図書の貸出返却業務を処理するシステムで、いわゆるオフィスコンピュータといわれるものです。その後、中型コンピュータが導入されたわけですが、これによって、その他の受入業務や目録業務

などのシステム化が実現されました。現在では、利用者は直接目録データベースを検索(オンライン目録検索)することも可能となり、図書館におけるコンピュータの利用はすっかり定着しました。

とくに目録システムは、全国の大学図書館が共同して、目録データを学術情報センターのデータベースに登録し利用するシステムが完成していき、急速に進展してきました。今では、100を超える大学の400万件以上の目録データが図書館端末で検索出来るようになっています。

今回の機器更新では、おもにハードウェア面に重点をおいて、コンピュータの処理能力や容量を約2倍、端末の台数を約4倍に増強し、また、ソフトウェア面では学部や研究所などの教室・研究室に既に設置されている端末（TSS端末）から学内の目録データを、利用者が直接検索利用できるシステムを導入する計画です。

すでに館内の利用者が目録検索するための端末も、2台から6台に増設されて毎日フル稼働しています。その目録データを作成するための端末は、学内の学部や研究所の図書館（室）に50台以上設置しました。今まで端末が少なく、目録データの作成が思うように出来なかった問題は、これでひとまず解消されることになります。これからは、目録システム利用のための研修を受けた職員が順次目録データの作成に従事し、全学の受入図書ほとんどが目録データベースに入力されることに

なります。

また、本図書館のコンピュータには、本学を含めて近畿北部3県（滋賀、京都、奈良）の国立7大学のうち6大学の目録データが入力されており、地域目録データベースを保有する、全国でも特徴あるシステムとなっています。これは、急増する図書や雑誌の文献情報の分担収集や相互利用の基礎となるもので、今後大学図書館が、高度化・多様化する利用者の情報要求に応じて行くための大きな手段の一つになります。

これからは、更新後のシステムの安定運用と質的向上、これまでにカード化されている目録のデータベース化などに向けて、システムの開発・運用を図るとともに、つぎの機器更新をめざしたシステムの評価と見直し、市場調査などが大きな課題となります。

## 学内 LAN（KUINS）完成と図書検索デモ

本学では、昭和62年度より学内の情報通信を円滑に行うためLAN（Local Area Network）の建設を進めて来ましたが、去る2月20日、3年間に渡る第一期工事の完成を祝賀して記念式典が開催されました。

名称を京都大学統合情報通信システム（Kyoto University Integrated Information System）、略称を英文名の頭文字を取ってKUINSとといいます。KUINSでは、コンピュータなどのデータ通信はもとより電話、ファクシミリ、画像などマルチメディアの通信が可能となるよう設計されており、近い将来実現されるISDN（Integrated Services Digital Network）にも対応できるようになっています。

式典には、学内外から150名ほどの来賓、関係者が参列し、またKUINSを利用した様々なシステムのデモンストレーションや機器の展示が行われました。本部地区と宇治地区でテレビ会議システムを使った遠隔講義の実演や、ひとつのワー

クステーションから複数のホストコンピュータへの同時アクセスの紹介、デジタル電話の展示など内容も多岐にわたり、これからのKUINSがどのように学内で利用されて行くのかが一目で分かるようになっています。

附属図書館では、会場に設置された図書館端末からKUINS、図書館用コンピュータを経由して学術情報センターに接続し、全国の大学図書館の所蔵する図書や雑誌の目録データベースを検索して、利用者の探したい文献がどの図書館にあるかを調査する業務を紹介しました。これまでの図書館の目録カードと違ってキーワード、出版社などの項目から探したり、複数の項目を同時に指定して条件を絞った検索ができることから、これからの図書館にとって重要な機能の一つとなるものです。

今後、大学図書館としても目録システムだけでなくさまざまな業務にこのKUINSを活用し、利用者である学生、教職員の方々に、より使い易